

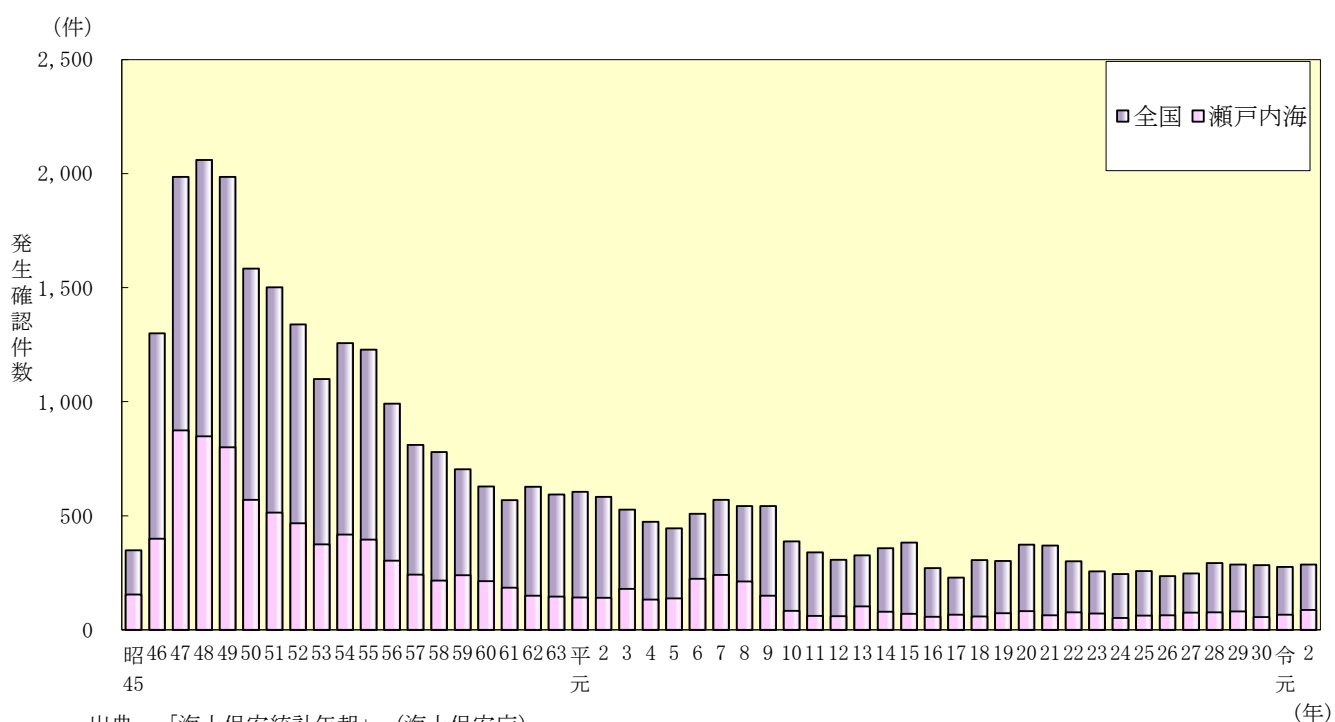
6 油による海洋汚染の発生状況

昭和49年の水島重油流出事故は、この種の事故が起きた場合の環境へ与える影響の重大さを広く国民に印象づけることとなった。

船舶等からの油による海洋汚染の発生確認件数は石油輸送量の増加とともに、昭和47年までは急増してきたが、図6-1にあるように昭和48年以降は減少傾向にある。これは「海洋汚染及び海上災害の防止に関する法律」による規制、監視体制の強化、廃油処理施設の整備等の成果が表れたものと考えられる。

平成9年1月2日には、島根県隠岐島北北東でロシア船籍ナホトカ号からの重油流出事故が発生し、日本海沿岸域に漂着、ボランティアも参加した大規模な回収作業が行われた。

瀬戸内海における油による海洋汚染の発生件数は、昭和47年の874件から、令和2年には87件と大幅に減少しており、近年は全国の20～30%を占めることが多い。平成20年3月には、明石海峡航路東口付近で船舶3隻の衝突事故により1隻が沈没し、沈没した船から流出した燃料油がノリ養殖を中心とした沿岸漁業に大きな被害を及ぼした。



出典：「海上保安統計年報」（海上保安庁）

図6-1 油による海洋汚染の発生確認件数の推移